第141回 筑波銀行支店長の

わがまち紹介

守谷市

未来世代に確かな資産を残す 未来へつなぐまちづくり

株式会社筑波銀行 守谷支店長
越後 賢治

守谷市長
松丸 修久 氏

筑波銀行は地域金融機関として、地域の皆さまとのつながりを深めるべく取り組んでいます。
「支店長のわがまち紹介」は、筑波銀行の支店長が所在エリアの市町村をご紹介させていただくコーナーです。
今回は茨城県守谷市です。筑波銀行守谷支店長 越後 賢治が守谷市長 松丸 修久氏にお話を伺いました。

高付加価値のまちづくり

現在、市長として3期目の市政を担っています。わたしが考える守谷市の魅力は、主に「住みよさ」「緑の多い自然環境」「災害リスクが比較的小さいこと」「充実した教育環境」の4つです。

「住みよさ」については、まず先達たちによる計画的な都市基盤、インフラの整備による良好な住環境が挙げられます。たとえば市内の上下水道の整備率は100%です。

また、本市は6km四方、36平方kmの非常にコンパクトな市域のうち、30平方kmの可住地に住宅がまとまっていることで、自転車でコンビニエンスストアや量販店、規模の大きな2つの医療機関へアクセスできるほど、日常生活を送るうえで利便性の高いまちといえます。

「緑の多い自然環境」については、都市公園や斜面緑地が多いことが挙げられます。自然を守るべきものとしてしっかり守ってきたことで、本市の大きな魅力の一つになっています。

「災害リスクが比較的小さいこと」も本市の魅力に挙げられます。本市は利根川、鬼怒川、小貝川の3つの川に囲まれていながら、ほとんどの住宅地が台地の上にあることで、水害に遭う危険性が非常に小さくなっています。また、台地に住宅地があることで、地震のゆれが周辺地域より小さい傾向もあり、恵まれた立地条件にあるといえます。

「充実した教育環境」は、重要な政策課題の一つとして継続して取り組んでいるもので、本市への転入理由を聞いたアンケートでは第3位になっています。

本市の「住みよさ」は、大東建託株式会社様の「街の住みここちランキング北関東版」で2024年まで6年連続1位を獲得した結果にも表れています。

これらの魅力の評価の表れとして、守谷駅前の地価が上昇しています。全国的に少子高齢化にあるなかで、本市にそれだけ需要が集まってきていること自体はありがたいですが、その需給のバランスを崩さないような政策を実行していく必要があります。

本市の人口は約7万人まで増加しましたが、住宅地供給の限界もあり、今後の大きな増加は見込めないでしょう。本市の主要な財源である固定資産税を確保するためにも、いかに不動産価格を維持してい

くかが今後の課題の一つで、そのために「高付加価値」のまちづくりを進める必要があると考えています。

新設インターチェンジ（IC）周辺を企業誘致、交流の拠点に

現在、本市は人口が増え、土地の需給では需要が供給を上回っている状況にあります。しかしながら、将来にわたる財政計画を立てるうえで、安定的な財源の確保は欠かせません。

本市には主要企業としてアサヒビール株式会社様と株式会社明治様の工場が立地していますが、大規模な工業団地がなく、これからどのように法人市民税を確保していくかが課題の一つとなっています。また、正社員として働ける場所の確保、職住近接の実現のためにも、（仮称）守谷SAスマートICの事業化にともない、計画されている「（仮称）守谷SAスマートIC周辺土地区画整理事業」において、新しい産業、事業者の誘致を図っていきます。

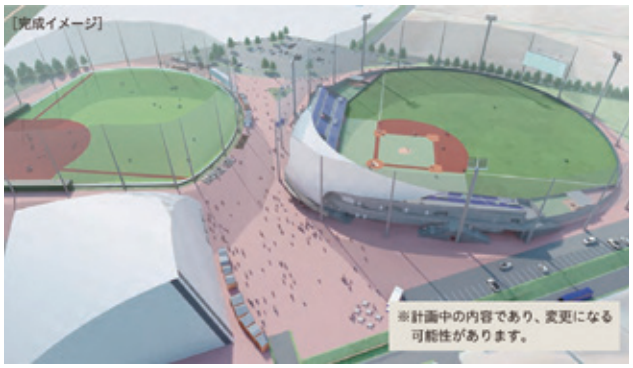
また、2023年11月には、この土地区画整理事業区域の隣接地に東京ヤクルトスワローズのファーム（2軍）施設の移転が決定しました。球場を含む施設の工事はすでに始まっており、2027年に開業予定です。

年間70試合が開催されるなかで、本市には対戦する他球団の選手も訪れます。せっかくですから市内に宿泊していただきたいということで、客室のベッドの広さや朝食会場などの条件を満たしたハイグレードなビジネスホテルを誘致したところです。

東京ヤクルトスワローズの2軍選手が施設内の寮に住み、イースタンリーグの対戦チームの選手が市内に宿泊します。球場は約3000人収容予定ですので、多くの野球ファンが本市に訪れると見込んでいます。このファーム施設の誘致によって、交流人口が増えること、そして経済効果にも期待しています。

本市ではこのファーム施設の移転に合わせ、隣接地に（仮称）守谷市総合公園の新設を計画しています。スポーツと健康増進の場所としてだけでなく、地域の活性化、さらには防災機能の向上も目指した施設にすることを検討しています。

運営に関しても事業採算を重視し、都市公園に民間活力を導入するための制度の一つである「パークPFI」などを活用し、自立自走できる施設を目指します。



東京ヤクルトスワローズ2軍球場完成イメージ

ＴＸ東京駅延伸の先にあるもの

つくばエクスプレスの東京駅延伸については、2024年12月に沿線の茨城県、千葉県、埼玉県、東京都の11市区で「期成同盟会」を設立し、わたしが会長に就任しました。まずは守谷駅発東京駅行き、将来的には守谷駅発羽田空港行きを実現させたいと考えています。

東京都は2040年までに東京駅から築地などを経由して臨海部の東京ビッグサイト付近まで地下鉄を開通させる事業計画を発表しています。

そこで、東京駅からさらなるアクセスの向上を目指し、早期の東京駅延伸の事業着手に向けて、茨城県や沿線自治体と連携し、国などの関係機関に働きかけているところです。

遊びを通して子どもたちの可能性を伸ばす

今の子どもたちは、昔と比べて運動能力が低下しているといわれています。筑波大学の教授とお話ししたときに、今の子どもたちはボール投げや木登りができない子が多いという話になりました。また、運動が脳を活性化させるという科学的エビデンスもあるそうです。

そこで、本市では子育て環境の整備施策の一つとして、「遊育（あそいく）」を推進しています。これは、体を使った遊びを通して、体力の向上をはじめ、コミュニケーション能力や創造力、表現力や自主性など、子どもたちの好奇心と生きる力を育むことを目的としています。

2023年12月には、屋内の遊育施設として「あそびの森もりっ子」をオープンし、子どもたちが安心して遊びながら学び育つことのできる環境を提供しています。

また、子育て支援施設において「Watch Me Play!（ウォッチ・ミー・プレイ）」の手法を導入して適切な愛着形成について啓発を行い、親子の信頼関係の構築を支援していきます。

遊育施設「あそびの森もりっ子」

こうした施策を行う背景には、「いい高校、いい大学へ行って、いい会社に入って…」という画一的な人生の目標、幸せの価値基準への反省があります。

メジャーリーガーの大谷翔平選手のような人物が出てこないにしても、子どもたちの可能性を伸ばしてあげたい。行政はある意味セーフティーネットとして、その人の幸せづくりにコミットできるか、その人の人生に寄り添うことができるかが問われていると思っています。

地域の課題を地域で解決

「地方分権一括法」という法律が2000年4月に施行され、国はそれまでの中央集権的な体制から地方分権へと大きく舵を切りました。わたしたちも、政策実行のためにそれまで県や国を見ていた目線を市民に向けること、市民と対等な立場で地域の課題に向き合うことが求められていると思っています。

本市では、未来へつなぐ「もりやビジョン」の一つの政策として「地域主導・住民主導による市民王国もりや」を掲げ、地域活動を支援しています。

これまでは、自治体が行政サービスを「提供する」ものと思われてきましたが、これからの行政サービスは、市民とともにつくりあげるもの、一緒にまちづくりをすることだと思っています。

たとえば本市で約半世紀前に住宅開発がされたみずき野、久保ケ丘三丁目、御所ケ丘五丁目地区と、今まさに開発が行われ、新しい住民の転入が進んでいる松並青葉地区では住民に年代の差があり、当然ながら行政に求めるサービスも異なってきます。

仮に公園に遊具を作りますといったときに、子育て世代の多い地区では子どもたちが遊べる遊具が欲しい、高齢者の多い地区では健康遊具が欲しいということになります。単一のサービスでは対応できないということです。

そこで、市内全域10地区に「まちづくり協議会」を設立していただき、それぞれの地区の実情に合った形で課題を解決していただくという仕組みをつくっています。

各まちづくり協議会にはある程度の予算配分を行い、地区ごとに優先事項に取り組んでいただいています。市民と行政が、一体となってまちづくりを進めるという考え方を共有することで、各地区の住民の皆さんの幸せに直結するようなことができるのではないかと考えています。

地道に実績を積み上げることがシティプロモーションにつながる

わたしは、単に露出度を上げることがシティプロモーションではないと思っています。行政は、重要政策の実行や行政サービスの質の向上など、やるべきことを地道に続けていくことで市民から客観的な評価をいただき、その評価を市民から自発的に発信していただく。このような流れが、外部的な市の認知度の向上につながっていくものだと思っています。

たとえば、本市に越してきた方が実感をもとに「教育環境が良かった」「自然環境が良かった」とSNS等で発信するのと、わたしたち行政が「守谷は良いところですから来てください」と言うのとでは、やはり前者の方がプロモーションとしての価値が高いと思います。

本市では7年前から「守谷型カリキュラムマネジメント」を継続し、教育の質を担保しながら、教職員、児童生徒の負担を軽減する週3日の5時間授業を実現しています。この取り組みは全国的に評判となり、2023年夏にはその成果について発表を行い、全国各地から教育関係者が視察に訪れました。これも市の特徴的な取り組みが評価され、市外へのプロモーションにつながった事例の一つです。

本市ではふるさと納税の寄付額の目標を100億円に定め、職員全員が営業マンという意識を持ち、取り組んでいます。2023年度の寄付額は約69億円と茨城県で2位でしたが、頭打ちになりつつあります。

行政ができることにはプロモーションも含めて限界がありますので、民間事業者の知恵を借りながら、さらなる寄付拡大を目指します。

その受け皿として「地域商社」を2025年度中に立ち上げ、商品開発や特産品の6次産業化などに取り組んでいく予定です。

ALT授業風景

筑波銀行に期待すること

わたしたち行政だけでは政策実行に関する情報収集などに限界があります。筑波銀行には情報の提供などでご協力いただけるとありがたいと思っています。また、そのなかで新たなビジネスエリアに進出するような企業についても、情報を提供していただけると助かりますので、よろしくお願いいたします。

（取材日:2025年3月11日）

わがまちの

ふるさと納税

守谷市

▲守谷市ふるさと納税公式サイト

このコーナーでは、「支店長のわがまち紹介」で取材させていただいた市町村の施策や事業、取り組みなどを紹介しています。

2,000品以上から選べる！バラエティー豊かな返礼品

「アサヒスーパードライ」

国内最大級の工場で作られるスーパードライは、返礼品の中でもダントツ一番人気！

「明治プロビオヨーグルトR1」

“強さ引き出す乳酸菌”でお馴染みのR1は、季節を問わず人気です。

「常陸牛」藤井商店

肥育から加工、販売まで一貫して行う藤井商店のお肉はリピート必至！

「倉敷産帆布×本牛革トートバッグ」大塚製作所

職人手作りのバッグは、両素材の経年変化が楽しめるシンプルなデザインが魅力！

「旬の季節野菜ベーグル」いばらきベーグル

季節の無農薬野菜を練り込んだ玄米粉ブレンドの栄養豊富なベーグル。

「サバラン」菓子工房もみの木

ラム酒をきかせたサバランは、店主自慢の一品！

「守谷ブレンドティー」サロン・ド・カフェよしだ

日本紅茶協会認定『おいしい紅茶の店』のマスターが厳選した紅茶のセレクション。

「動くクマのパン屋」ペントン企画室

ハンドルを回すと動くハンドメイドの木製おもちゃは、作者の温もりが伝わります。

「透明氷製氷器 ice drops」大塚製作所

家で透明な氷が作れる製氷機。隠れた人気返礼品で、毎年多くの方に選ばれています。

守谷市イメージキャラクター「こじゅまる」の誕生を記念したNFTアート

市の鳥・コジュケイをモチーフにした「こじゅまる」は、市制施行20周年をきっかけに誕生しました。それを記念して、こじゅまる作者のイヌイ マサノリ氏にNFTアートの制作を依頼。背景には、観光名所である「守谷野鳥のみち」がデザインされています。市制施行20周年にちなみ、数量限定20点です！

≪NFTとは？≫NFTは、ブロックチェーン技術を使ってデジタルアートや音楽などの所有権を証明するものです。